

「現地を訪問して想うこと」

2010年 院言語教育情報研究会 卒業

宮澤 正俊

校友会主催の「東日本大震災支援事業東北応援ツアー」の福島県会津コースに参加する機会を得た。私は、震災3ヶ月後一週間ほどだが、被災地に行って被害にあった家屋から瓦礫やヘドロを掻き出すボランティアに参加した。その後、チリで日本語を教えるボランティアに参加した。海外にいても交流した東北の人たちの姿が思い出されて、ずっと気になっていた。ところが、私の行ったチリは地球の裏側にある遠い国だが、東北被災地のことを心配し、温かい言葉を送ってくれた。あんな遠い国で、被災地がどうなっているのかもつと知りたいと思う人がそんなにも多いとは思っても寄らなかった。

今回ツアーで最も有意義だったのは、「風評被害」という被災にあった福島の人々に直接触れ合うことができたことであった。福島の校友会のメンバーの方々が中心となって会津を案内していただいた。その中でも原発の汚染から逃れて、今も家族がバラバラで生活している方がいらして、「風評被害」の根の深さを実感した。しかし、私のような外部の人間ほど物事を暗く考えがちなのとは対照的に、福島校友会のリーダーの方々は、みんな明るく希望を持って語ってくださり、私は反って元気をもらって帰ってきた。

福島校友会の幹事長さんも若々しく、颯爽とバイクに乗って現地を案内して下さり、勉強会では、2:6:2の定理を教えていただいた。2は、まったくFukushimaに関心がない人、6はどちら付かずの人、最後の2は、深く関心を寄せ、Fukushimaを訪れたいと思っている人。考えて見れば我々このツアーの一行も最後の2割にあたるのだが、たとえ被災地支援のために大したことはできなくても、こうして食べ物がおいしく、歴史豊かなFukushimaを訪れ、楽しんでもらって、その経験を持ち帰って他の人に伝えてくれるだけで十分だと言う。私もこの定理を信じたい。日本にいる2割の人どころか、まだ何も「風評」に染まっていない海外の人たちがいる。数は少なくとも真価がわかる人だったら、必ずやFukushimaを訪れてみたいと思うだろう。さっそく、今、日本文化祭をやろうとしているチリの人々にFukushimaに来ないかと連絡を取ってみようと思う。